

---

## 「対応の難しいケース」への行き詰まりを打開するために

100%解決できなくても関わり続けることが大切 ～本人の特性と取り巻く環境についての実態把握

- ① 個別の教育支援計画      ② 環境図 (エコロジカル・マップ)

兵庫県神戸市立有野中学校

校長 西本 佳子

---

### 1. はじめに

本校は1年生5クラス、2年生5クラス、3年生5クラス、特別支援学級1クラスの中規模の中学校で、全校生徒は518名である。古くからの農村地帯(有野町)と新興住宅地(藤原台)の両方が校区であるが、新興住宅地の生徒が多くを占めており、経済的にも余裕のある家庭が多い。生徒数は3年後までは微増の状況である。生徒は、授業や生活面では非常に落ち着いているが、悩みをかかえ自死願望のある生徒や心理的な面からの不登校生徒が多く、指導支援の個別対応が欠かせない。保護者は学校に対してはおおむね理解があり協力的であるが、時に突出した対応が必要なケースがある。教員が、そういった生徒・保護者への対応に苦慮する場面も少なからずみられる。

### 2. 研究テーマ設定について

昨今、学校には保護者から様々な要望が寄せられる。学校側の初期対応の遅れや認識のずれによって問題が深刻化し、長期的な対応を余儀なくされるケースが多くある。本校は「1. はじめに」にも述べたように全体的に落ち着いた学校生活を維持することができている。保護者もおおむね学校に協力的である。しかし、通常学級においても健康面、情緒面、発達面からみて支援の必要な生徒は一定の数で在籍する。対人関係に起因するトラブルや、学業成績不振への不安や困り感を抱えている生徒や保護者も多い。学校生活や指導への激しい苦情や応えられない要望を保護者が学校に持ち込むケースもある。その要望が生徒の実態と乖離しており、生徒の抱える問題解決には至らず、事態が進展しないケースもある。

担任や学年担当教員は、生徒の実情を踏まえた支援・指導を心掛けている。しかし、学校生活で起こったトラブルの指導の経緯などに不満をもつ保護者もいる。また、保護者自身が支援を要する子どもへの対応に困

難を感じているケースもある。そこで、本校の職員研修の一環として、講師を招いてこのような事態の解決に向けての研修を計画し、研究・実践へとつなげることにした。

一つは「支援の必要な生徒に対する理解の仕方」として、神戸市の通級指導教室の学校支援教員より発達障害の見地から支援の必要な生徒への具体的な関わり方について研修をおこなった。もう一つは大阪大学大学院人間科学研究科の小野田正利教授より、トラブルを大きくさせないために事案の原因と背景の分析のための研修をおこなった。

二つの研修を通して「決して一人で対応しない、一人で抱え込まない」ことを重視し、学年または学校単位の教員集団で取り組むことの共通理解をした。

様々な事態に対応するためには、対象生徒の「実態把握」が何よりも大切となる。そのための方法として、

- (1) 『個別の教育支援計画』の作成
- (2) 『環境図 (エコロジカル・マップ)』の作成
- (3) 「基礎的環境整備」
- (4) 「合理的配慮」

を、実践することとした。実践については、無理なく持続可能的に取り組めることを大切に、本校教員に理念として根付くように、という思いであった。

### 3. 研究の内容

- (1) 「支援の必要な生徒に対する理解の仕方・具体的な関わり方」～『個別の教育支援計画』

生徒の言動の裏にある背景や要因の「実態把握」をおこない、それに基づいての支援をすることが求められる。通常学級の生徒の中には一定数の割合で特別な教育的配慮を必要とする生徒が存在する。そのような生徒の多くは対人関係や学習への困難さを抱えている。学校生活や学習活動への困難さの要因によって支援が異なる。対象生徒のたとえば「得意、不得意を知ること」によって支援の手法や留意点が見えてくる。「実態

把握」のための手法の一つとして、『個別の教育支援計画』の作成、活用が有効である。

『個別の教育支援計画』を作成する利点は様々ある。まず、教員が対象生徒をよりじっくりと観察することになる。さらには複数の教員の観察が一つにまとめられ、教員一人では気付かなかった見方が新たに追加されることにより対象生徒の全貌が一層明らかになる。表（文書）で見える化されることで教員同士の共通理解がすすみ、協力・共感の気運が生まれる。

### (2)「対応の難しいケースのための事案の原因と背景の分析のしかた」～『環境図(エコロジカル・マップ)』

本校のいくつかの事例から、要望の真意について考えてみた。常に生徒にとっての最善の利益を目指すという目的を見失わない姿勢が求められる。一方で生徒や家庭（保護者）の背景と状況を推し量る想像力も必要である。ある事例をもとに「状況把握」のための『環境図（エコロジカル・マップ）』の作成をこころみた。

『環境図（エコロジカル・マップ）』は、事案に関わる人物の特性やその関係性を視覚的に表したものである。各自の持つ情報を集めるとともに、次に各々が対象生徒に対して何ができるかを確認するためである。当事者意識をもって学年、学校単位の多くの教員が関わる姿勢が大切である。『環境図（エコロジカル・マップ）』の作成は、話し合い、相談、対応の協議としての場としても大きな意味を持つ。教員の孤立化を防ぐことにも多いに寄与するものでもある。

### (3)「基礎的環境整備」

今や既知の概念となっではいるが、すべての生徒に心地よい環境を教員が常に意識して実践していかなければならない。

### (4)「合理的配慮」

個々の状況に応じて配慮される支援であり、均衡を失ったもの又は過度の負担（教員にとって）を課さないものであることが大切である。

## 4. 研究の実践例

### (1)「個別の教育支援計画」の作成

『個別の教育支援計画』とは、対象生徒一人ひとり

に対してあらゆる方向からの情報をまとめ、実態を浮き彫りにするものである。実際には、以下のような項目で複数の教員からの意見や観察をまとめた。

- ① 本人の思い・保護者の思い
- ② 多動性・衝動性・計画性・注意集中など
- ③ 社会性・対人関係・情緒・こだわり・感覚過敏・興味関心・コミュニケーションなど
- ④ 学習面（聞く・話す・読む・書く・計算・推論・考査点数・通知表など）
- ⑤ 運動面（微細運動・粗大運動・器用不器用など）
- ⑥ 専門機関相談歴（検査結果・診断名・投薬など）
- ⑦ 家庭環境など

これらをまとめたうえで、

- ⑧ 短期目標
- ⑨ 支援の手立て
- ⑩ 評価と今後の課題

を、具体的に見つけ出していくものである。

### **【事例A】～支援の困難なAへの取り組み～**

Aは自らの感情を抑えることができず、突如として暴力的な言動をとることがある。中学校入学後は徐々に教室に入ることができなくなった。生徒本人・保護者の思いと実態がともなっておらず、登校後は別室で過ごしている。今後の支援の方策を立てるために『個別の教育支援計画』を作成した。「実態把握」において、Aに様々な場面で関わる教員が情報交換をおこなった。部活動での様子や別室での過ごし方など、担任や学年教員だけでは気づくことができなかった面を知ることができた。同時に、支援計画の作成や検討をおこなうことで、短期目標や支援の手立て、今後の課題などが明らかになった。

『個別の教育支援計画』作成の過程で実際に出てきた言葉を上記項目ごとに以下にあげる。

- ① ・先生方に本人理解をしてもらい中学生活を送ってほしい。
- ② ・興奮すると自分の言葉で気持ちがヒートアップしていく。
  - ・座学では集中力が続かず、時間がたつにつれてイライラする。
  - ・一度怒り出すと友達や教員に暴力をふるい、衝動性が非常に高い。
  - ・不安がイライラなどの態度としてあらわれる。
- ③ ・家では母親には優しい。

- ・自分の持ち物を人に（母親にも）触られることを極端に嫌がる。
- ・自分が立てる音は良いが、人が立てる音や予期できない音にとっても敏感。
- ・状況が読みにくく「なぜこんなことをしなくてはいけないのか」と言う。
- ・集団行動が苦手。周りのペースに合わせて行動することでイライラがつのり、だるそうな態度になる。

- ④
- ・見通しがあれば課題や学習に取り組むことも可能。
  - ・絵、写真、動画を活用した授業には取り組むことが可能。
  - ・語彙はよく身につけており、抽象的な概念を理解する力も良好。語彙に比べ、学習による知識や社会常識の獲得量が少ない。

- ⑤
- ・バスケットボール部。

- ⑥⑦
- ・(省略)

- ⑧⑨⑩
- ・本人の過敏さ（大きな音への不安の高さ、所有物に触らない）の配慮が必要。

- ・本人の気持ちが安定している時に、安心な人を媒体にして人間関係の広がりの機会をつくる。
- ・本人の興味関心、世界観に共感的な理解を示し、やりとりの糸口にする。
- ・本人が場面理解に戸惑っているときは、その場面の解説をしたり、気持ちが落ち着いた時に振り返り説明したりする機会を持つ。
- ・とるべき行動について、具体的に短い言葉で伝える。
- ・新規の行事や活動には、事前に活動の内容の見通しが持てるようにする。
- ・感情が高ぶった時に、クールダウンできる場所と時間を確保する。決められた場所で過ごせてその後本来の活動場所に入れた時にそれを認めて強化する。
- ・事前に本人と相談して、教材と分量を一緒に決める。
- ・本人の習得できている内容から始める。
- ・本人の役割を明確に伝え、人の役に立つ経験を積めるようにする。

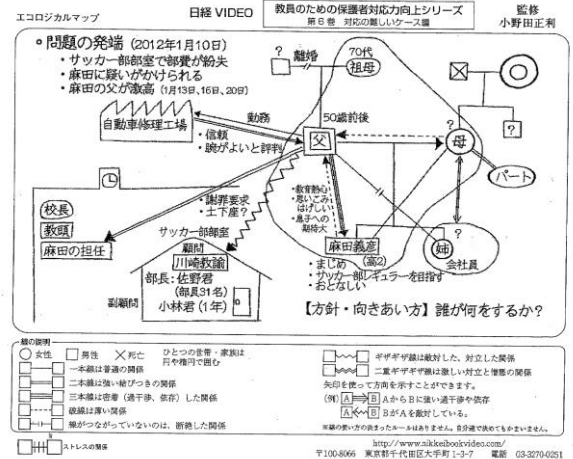
すべての言葉に「そういえば」と思い当たる節がある。やみくもにその場当たりで対応するのではなく、表にして「見える化」し共通理解したうえで論理的に

しかし温かく対応することの必要性が明らかとなった。

## (2) 『環境図 (エコロジカル・マップ)』の作成

『環境図 (エコロジカル・マップ)』とは、事態の経過や問題点をまとめ、対象生徒や保護者を取り巻く相関図などを1枚の紙に図や矢印や語句を使って書き出し、整理するものである。

これを作成することにより、教員間で情報の共有化がはかられ、見える化することによって問題点の本質を見抜くことができる。また、客観的に状況をとらえることにより、今まで見えなかった視点に気付くことがある。そしてより具体的な方針がたてられ、担任(担当者)が孤立しないことにもつながるのである。



↑ エコロジカル・マップ (小野田正利)

## 【事例B】～長期欠席生徒Bへのアプローチ～

父親の意向で担任はBと面会することができなかった。そこで『環境図 (エコロジカル・マップ)』を実際に作成した。図の中心にBを置き、母親、父親、祖母、親戚、関係機関、担任、学年教員、クラス友人、他クラス友人、などを図に書き込んだ上で、矢印や文章、単語などを書き込み互いのつながりや関係の濃淡がわかるよう表現した。その中で、他クラスの友人Cの存在が本人にとってキーとなることが判明した。Cは一緒に外出をする仲でありBと信頼関係にあることが浮き彫りとなった。これらのことは、複数の教員と一緒に図を作成するなかであらわれてきた。また、父親のはたらきかけは本人には伝わっていないことも判明した。そこで、Cに対して、担任がBと面談を求めていることを伝えたところ、家庭訪問をした際に7か月ぶりにBと面談することができた。Bと信頼関係に

あるCが、「担任が会いたがっている」とBに伝え、実現したものと考えられる。このように、『環境図（エコロジカル・マップ）』の作成が情報共有の場となり、Cの存在の発見がBの支援につながった。

### (3)「基礎的環境整備」の例

本校でおこなっている「基礎的環境整備」の例としては、以下のようなことがあげられる。

- すべての教室の机と椅子の脚にテニスボールを取り付け、雑音を軽減している。
- 教室の前面掲示はスッキリとさせ、刺激の軽減をはかる。
- 物の置き場所等をきちんと「見える化」し、余計な指示を少なくする。

これらは一例であるが、このような整備をおこなうことによって全ての生徒にとって活動しやすい場になるであろうことは想像に難くない。

### (4)「合理的配慮」の例

本校でおこなっている「合理的配慮」の例としては、以下のようなことがあげられる。

- 指名されることに極めて強い抵抗のある生徒に対して、「指名しない」ことを全教員で共通理解する。
- 紫外線に極めて弱い生徒に対して、日傘の使用や夏季の長袖の制服や体操服をみとめる。
- 心理的要因による不登校生徒に対して、状況に慣れるまで部活動のみの参加（出席）をみとめる。

これらは一例であるが、このような配慮をおこなうことによって支援の必要な生徒が一定の安心感をもって学校の教育活動に無理なく参加できる。なかには、自信をつけて次のステップへ進むことができたケースも散見される。※現在は日傘・夏長袖など全体的に認めている

## 5. 研究のまとめ

生徒一人ひとりに特性があり、それによって支援の方向性が異なる。支援・解決の方向性を探るためには対象生徒の「実態把握」が重要である。その手法として『個別の教育支援計画』の活用や『環境図（エコロジカル・マップ）』の作成を学び、実際に応用し対応に

生かした。うまくいったケースや簡単にはうまくいかないケースがあるが、行動支援の基本原則を踏まえつつ、今後の生徒支援に活かしていきたい。また、その作成には学年・学校単位の複数の教師で協議することが求められる。このことは担当する教員の孤立や、過度の負担を防ぐことにもつながる。複数の教員が対象生徒に関わるのが、支援・解決の糸口となることもある。外部講師による校内研修を経て本校の研究につなげていけた意義は大きい。より組織体制の強化を図ることにつながると考える。

対象生徒の状況は関わりや時間や環境と共に変化していくものである、定期的な「実態把握」をおこなうことが必要である。今後さらに研修・研究を進め、よりよい生徒支援と保護者への対応がおこなえる教員集団に成長していきたいと考える。

多様な特性のある生徒一人ひとりと向き合っていくことは、私たち教員に課せられた使命である。しかし、担任（担当者）一人が抱え込んで追い詰められてしまうパターンは避けなければならない。また、100%の解決というのはあり得ないので、解決しなくとも良いから関わり続けていくことが大切である、ということを経験した。これを教員全員で再認識した。

### **【参考】**

- 「エコロジカル・マップ」づくりを通して、難しくなる保護者対応トラブルの出口を見つけよう

(ワークショップ・テキスト)

大阪大学大学院教授 小野田正利

- 「教員のための保護者対応力向上シリーズ」

第6巻 対応の難しいケース編

監修 大阪大学大学院教授 小野田正利